



自作の人形に囲まれた 相馬君子さん

——君子さんは日常どな風にお過ぎですか。

とにかく、お元気である。シミひとつない、艶やかなお顔はとてもその年齢には見えない。伺つてみると実家は高田の繁華街のほど近くにあり、仕出屋さんを業としていたということである。そのことと関係があるかどうかはわからないが、何か元氣を通り越した華やかさや色気さえ感じじる。

大正四年一月八日生まれ、九十一歳。近所の事業所が行つてゐる「お茶のみ」の集まりに週一回出かけて一年半程度になる。要介護認定はない。教師だった夫は昭和五十年没。旧・大瀧中学校校長が最後の勤めだった。これが君子さんの概要である。

君子さんの元気の源を探るため話を聞くことにした。

豊かな人生
思いどおりに

節度を持つて

ていたのさ。週に二回くらい民謡を歌いに行つたり、前から社交ダンスをやつてたから、レクダンスを楽しんだよ。

―― 趣味で手芸をなさつ
て いるそ うですが。
最初からやつてたのは
五円硬貨で鎧や城を作る
手芸ね。

いになるとその仲間たちがみんなで遊びに来てた。うちが料理屋からカフェへ商売換えて、そのときに会ってね。だんなの家は農業をやって

ガアムへ行つたり。

硬貨で作ったかぶとが玄関を守る——でも、そこまで連れてつてくれって頼むのが嫌ださ。自分の子相手でも遠慮するんだ。自分で自転車で行か

自転車で行か
ん。でも遠慮する
んだ。自分の子相手
の人が嫌だ。それまで
連れつてくれて頼
りたまう。でも、そこ
に健康にも気分
にも。

やつたら、つてすすめられたのね。私不器用なものだから、失敗しても「インならいたまないでよ。これならできる」と思つてはじめたら面白くてさ。それで銀行へ行つてお金両替してもらつては作つていましたわね。コイン手芸をやめてつぎ何

いて、私の実家と商売が違つたんだけど、それがうまくいってね。

らないしと思つて、四国八十八カ所を巡つてきましたわ。それで八十になつたら年寄りの仲間と近所でやわやわと温泉入つてましょと思つていたら八十代も過ぎて九十になつちやつたね。（笑）

て、いっぱいとつてあるんだ。ボロをなくそと
思つてやりはじめたのに、
ボロを集めるようになつ
て、だんだん増えるばつ
かりに。

なんかいないと思うわ。
——子育ても終わってか
らの生活は……
だんなと六十歳で死別
して、六十代の達者なう

れるときはよかつたけど
足が痛くなつてから、な
かなかそういうわけにも
年とつたら声も出ないし
ね。

いろいろ作り始めたのはだんなが亡くなつてから。その前は暇がないもんねえ。子ども育てないもうやいけないし、田んぼはしなきやいけないし。

なことわが息子にも聞かせてないんだよ。(笑)
若いころはたいそしたけどね、好きで来ただけ仕方ない。それで我慢もできただろうね。

やろうと思つて、木目込み人形に切り替えたんですね。

みつけるわ、他人のやつ
かいにならなくてもいい
わ、と思つてたの。こん

つど 集えば仲間

ボランティア

小林サチ子



折紙で一緒に楽しむ小林さん

「今日をもつてこの会を終わりにしようと思いまが……」本年度最後の集い十二月二日、「友楽会」の会長が話し始めた。脳卒中後遺症者（片麻痺、言語障害など）の会が発足して二十年近くになら。突然、体の機能を失い、歩行困難や言語能を失った者にとってその失意や悲しみは如何ばかりか健常者には想像もできない。リハビリと言ふ市保健師さんの声がけに杖にすがりながら集まってきたのが脳卒中者の会である。そして

「今日をもつてこの会を終わりにしようと思いまが……」本年度最後の集い十二月二日、「友楽会」の会長が話し始めた。脳卒中後遺症者（片麻痺、言語障害など）の会が発足して二十年近くになら。突然、体の機能を失い、歩行困難や言語能を失った者にとってその失意や悲しみは如何ばかりか健常者には想像もできない。リハビリと言ふ市保健師さんの声がけに杖にすがりながら集まってきたのが脳卒中者の会である。そして

さまざまなボランティア活動に取り組み、地域の老人会長も務める、上越市在住の小林サチ子さんから脳卒中後遺症者の会についてご投稿いただいた。小林さんは幅広い活躍をしておられる方である。そこで投稿原稿を中心にもう少しお話を伺ってみようと思いつつ、インタビューを試みた。

投稿執筆者小林サチ子さんへのインタビュー

「私にとってのボランティアの原点」を語る

脳卒中後遺症者の集まり「友楽会」は終わりになりましたけれど、これでお別れというのも切ないな、と思って、それで家で介護をしている人たちが集まる「介護ばあちゃんの会」を提案したんですよ。もちろん、だんなもくつづいてきなければ来い、というような。「介護をしている人も家に閉じこもっていないで表へ出よう」という目的があるんです。

現在二つの地域でやっている高齢者の集まりは、まず隣の町内で一人暮らしや体の具合が悪い人を集めて毎週会合をしていたのが始まりで、それから私の住んでいる町内でも申し出があり、今の「ふれあい会」に至っているんですよ。

当初、特に家に閉じこもりがちな人たちを呼び出してわいわい楽しむことを目的にしていたのですが、ここはひとつオープンにして、家にいて暇な人なら誰でも出て来いって声をかけたら、元気な人同士で声をかけ合って出てきてくれるんですね。まあ、その人たちも加わっていただいたお陰で、もう五年も続いているんですよ。

毎週何をしたらいいか考えて、手芸の作品を作ったり、オリジナルの体操をしたり、園児と一緒に遊戯をしたり、いろいろなことをしています。少しでもみんなのためになっているとしたらすごくうれしいことですね。

私もそこそこ忙しくて、今でも先ほどの二つのふれあい会に通ってボランティアをしています。あとは、老人会の運営も任されて老人会長に推されて何年になるかしら。「もうやめる」って言ったら、「あんたが会長をやってればまた何人も入ってくるよ、だからもう一年やんない」っておだてられて、その一年が何年になったか。

高齢化社会になると、高齢者同士助け合いしてかなきゃダメだと、それをつくづく今感じている。いくら福祉が充実してきたといっても、助け合いがなければだめ。ふれあい会はそれを目標に作ったの。やっぱりお互いを知り合えば、仲間であれば助け合えると。

例えば誰ともしゃべらないでいた人が加わってきて話をするようになったというのもあります。今まで近所に住んでいても交流のなかった人同士がたまたまそういうきっかけで、話が出来るようになった。

雪が降っている頃だったかな、「助けてください」と電話が来た。飛んで行ってみたら、「昨日からずっと苦しくて、起き上がれない」って。おかゆを炊いたり、おかずを作り食べさせたりしてあげたんだけれども、その後は、心も明るくなつて、散歩にも出られるようになってね。そういう一人暮らしの不安を持っている人が私たちの町の中にはばつぱつといふ。

一番必要なのは会話や愛情であったりするんだけども、そういう面のすべてを補うのは大変なことだと思います。でも、友達であれば、困ったときはお互い様だから頼みやすい。若い人たちが独立して家から出て行ってしまえば、どの家もお年寄り一人が二人になってしまふんだから、そういうご近所にしようと、その思いで、私は一生懸命友達作りボランティアをやるわけ。

ふれあい会をひとつの町内だけでやるのでなく、一丁目から五丁目まで全部でひとつの会をやるようにすすめられたことがあったんです。だけど、お年寄りが集まつくるのにそんな広い地域の中のどこかを借りて「さあ、来てください」と言ったって困る話だよね。ひとつの町内という小さな範囲でやるからこそ出でこられるのであって、広い地域にひとつだけ集会場を作つても、一丁目から五丁目まで全部のお年寄りは集まつてくれませんよ。その後、市内でも小さい地域での集まりが増えてきたようです。

そんなボランティア活動を行つても個人的な不安はいろいろなところでやりますよ。介護や認知症は他人事でないんだ、そんな考えが忍び寄つてくる。五十代六十代はまだ他人事だと思っていたけれども、七十代に入って周りで認知症になつたり亡くなつたりする人が出てくると、次は自分の番かって、気が弱くなっちゃう。でも、それまでは私自身、できることを楽しくやつていていますけどね。



園児たちとの笑いも元気のもと

いるメンバーたちである。私たちの役割は、まず、利用者の集会活動が楽しく安全にできるよう陰の力となることだ。会場設営、お茶や昼食の準備や接待、お楽しみ活動レク

の計画と運営、バス旅行の付添等の仕事である。

お年寄りの介護に役立つた。「あゆみの会」もで、幸和会は総力をあげて準備やら運営に当たつてた。

しかし、今日でこの会は閉じられることとなつたのだ。

「あと一、二年は……、と思っていたのですが、体力の限界が見えてきました。少し動けるゆとりを残して……」と会長は決意を述べた。

二十年の足跡はそのまま二十年の老いでもあつた。杖につかまつても足が前に出ない。車椅子から立ち上がるのも困難。少しの段差を越えられない。世の中はバリアフリー、バリアフリーと唱えられるが、トイレ等は片足の障害者にはまだまだ難渋する場面もある。

その上、ボランティアのメンバーも次々と体調をくずしたりして、老いの道を辿つてきた。こ

の五月、私と組んでいた

お母さん

上越市



お花見のこころ

お母さんのそばにいたいの。ごはんも一緒に食べたい、何処へも行きたくないの。本当に。お母さん！」
デイサービスへ行く支度に追われバタバタしている私に九十三歳になる義母が訴えます。それはまるで幼稚園へ行くのを拒み、ママに駄々をこね、甘えている幼児そのものでした。今まで、そんな風に言われたこともなく、私の言うことを何でも素直に受け入れてくれ、あまり我儘を言わされることもなく過ごして來たので、『ああ、そんな風に思つていたのか……』と、改

「今日はお風呂に入
つて来られるから……」
と、迎えの車が来るまで
何度も繰り返し言い聞か
せ、送り出しました。

日毎、認知症が進むの
を感じた当初、戸惑い、
悩み、何で私が、自分だ
けが、ここまで面倒見な
ければならないのか――
とか、昔多少なりともあ
つた嫁姑の軋轢が頭をよ
ぎる事もある日々でした。
しかし、二年前、大腿

めで義母の気持ちを感じ
気がつけば、最近あまり
笑顔で接していない自分
がいて、それなのに……
と胸がキュッとなつた朝
でした。それでも、

「お母さん！ 親でなければ、こんなにしてもらえないと」などと、私を実母と混沌し、慕い、甘える義母を愛おしくさえ思えるようになりました。

骨頭骨折で歩けなくなり、要介護度4、車椅子の生活を余儀なくさし下の世話から、全てをさせられ、何事も私の掌中には委ねられた現在、日には

娘(左)と三人で

良かつたら貴女を
の子供にして上げ
もう少し、二人で
て行こうね……。

て行こうね……

戦争で連れ合いを亡くし、二人の息子を一生懸命に育て、頑張つて生きて来た義母です。苦勞も並大抵ではなかつた筈です。長年勤め、退職目前に病に倒れ、楽しむことなど、本当に少なかつた人生だと思われます。

介護保険制度のお陰で

テイサーヒア　シヨート
ステイを利用して頂き
今後も、ケアマネさんの
お力添え、それに家族
の協力で、何とか母の限
りある日々が少しでも穏
やかに暮らせますように
その日が少しでも長く続
きますようにと願う今日
この頃です。

飞案内



た営業所を統合した新潟支店を昨年十月、新潟市上沼^{うわぬま}にオープンしました。

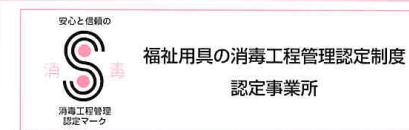
支店では前述のサービスに加え、レンタル福祉用具の消毒工程を新設し、最新の消毒機器を導入しました。直接目に見えるサービスではありませんが、この「消毒」が病原菌感染のない安全な福祉用具をお届けできる基盤になつていま



医療用具
許可



**医療用具
許可** 加熱蒸気(80℃)・抗菌処理・
高温加熱処理の三重システムに
より殺菌消毒・抗菌・殺虫・消
臭をより一層確実に行います。



- 新潟支店**
新潟市上沼 710
TEL 025 (280) 8833
FAX 025 (280) 8215
- 新潟ユニゾンフラサ店**
新潟市上所 2-2-2
TEL 025 (280) 8668
FAX 025 (281) 4567

新潟支店がオープン